





小 酒 井 不 木

はしがき

故小酒井博士が多能多趣味の人であられたことは世間周知のことであり  
ます。

俳句にも趣味を持たれ多くの名句を詠まれました。

こゝに蒐めましたのはその一部であります。

端的に卒直に自己を表現する文學として俳句ほど適切なものはありませ  
ん。

十七字の中に作者の人生感、社會観、宇宙観を盛ることが出来るからで  
す。

この集を読むことによつて私は故博士の佛を新しく思ひ出すことが出来  
ました。

それは高朗にして飄逸であつた佛であります。

親しかりし人の遺稿を読むことの寂しさ悲しさを身に濕めながら、一方  
この句集を読むことによつて、故博士の佛をふたたびまのあたりに思ひ浮か  
べ、懐しさを覚える者は私一人だけではあるまいと思はれます。

手向句

鶴立ちて後に抜毛もなかりけり

國枝史郎

昭和四年五月

不木句集 目次

春	.....	一頁
夏	.....	二頁
秋	.....	三〇
冬	.....	四
短句	.....	五一



不木句集

春 附 新年

初陽 恭しく雲整ひて初陽かな

初東風 初東風や乳母すこやかに箸をとる

春

もしくと唱ふ子供や春の森

成金の噂もありて村の春

その果に古城見えたり牧の春

斷髪の女短かし庭の春

靴の紐春の芝生に解けてけり

出揃ひて僧の餌をやる池の春

餘寒ねころびて讀むには早き餘寒哉

春日うれしさのそこはかとなき春日哉

長閑 草長閑妻一と日待つ門の柵 (偶作回文)

日永 眠たさを猫もつきあふ日永哉

春宵 春宵や疊をすべる猩々緋

千金の子の惜しみけり春の宵

願かける娘に鐘鳴るや宵の春

春夜 春の夜や襖に書いた狐つき

暮春 公園の灯の赤々と春はゆく

徂く春の道きく旅の法師かな

ゆく春を亡命客と語りけり

寝不足の鬢おもたし春の徂く

春陽

母の手の剃刀にさす春陽かな

鉄持つ手の皺照らす春陽かな

一雨は藪にのこりて春陽かな

春の雲

春の雲しばらく北にうづくまる

春風

春風やところゝの家普請

緋の旗の千石船や春の風

春風やごとりと行く車

春風や夫婦して塗る塀の板

春風や額朽ちかゝる草の庵



春風や八百屋お七の繪看板

乳母も來てお嫁ごつこや春の風

春風や犬に物いふ縁の先

軒並に娘のありて春の風

春風や酒倉建てる木遣歌

陽炎 陽炎や芝生に小さき忘れ草履

陽炎や笑ふごとくに鬼瓦

朧月 ぬき足の背戸をあくれば朧月

春雨 兩國に大蛇つきたり春の雨

春雨に光れる鉢を入れにけり

水温む 読みかけし八犬傳や水ぬるむ

雛 青い眼の人形も来て雛まつり

草餅 草餅に姉のいれ齒の光りけり

摘草 花嫁もまじりて草を摘みにけり

春愁 春愁やかきむしりたき帯の下

鶯 鶯の隣まで来て去りにけり

囀 囀やからかささげて戻る人

燕

燕やひる過ぎからの小糠雨

蛙

酒つくる僧おどろかす蛙かな

柳

芽柳や縁に爪剪る洗ひ髪

椿

こぼしたる水のにじみや落椿

小山内氏追悼

花

花蔭に島田の髪なほしけり

花の坂肥満の友とのぼりけり

小坊主も來てくるひける花見哉

花片を蟹横著にはさみけり

寫生する兒の首せはし花の散る

花散るや温泉宿の旗あかし

花散るや乳母腰かける阿彌陀堂

拜殿にぬかづく巫女や花吹雪

山吹 山吹のつゝましやかにつゝじ山

藤 手品師も来てあふぎけり藤の花

土筆 裏畑に土筆いつしかひよろ長き

蒲公英 蒲公英や人魂出るときく屋敷

菜の花 菜の花や一やすみして牛車

夏

五月 新妻の袖ちらつくや五月畑

梅雨 梅雨晴や煙吐き出す排水機

白はえや酒倉ならぶ向河岸

暑

神主の砂濱わたる暑さかな

板塀の黒あつくるし上屋敷

照りかへす硝子のかげの暑さ哉

涼

神苑に涼しき杉をあふぎけり

涼しさは木の間の富士の裸かな

繪草紙の風に吹かるゝ涼しさよ

涼しさに寝かねし唄や門の月

短夜 短夜や水郷いそぐ旅の人

夏深し 家々は畠を持ちて夏深し

秋近し 硝子戸の松のかげりや秋近し

薰風 薰風や兒等かたまりて橋の上

薰風や傘干しながら通る橋

青嵐 鍵を待つ寶物殿や青嵐

五月雨 五月雨や闕にはなつく蛇の目傘

雷

遠雷やものうく暮るゝ四五ヶ村

垂れさがる蜘蛛たゆたふや遠雷す

夕立

夕立や三味線かつぐ旅藝人

雲の峰

三階の横にあふぐや雲の峰

軍港の上にならぶや雲の峰

夏の月

湯上りや山からのぞく夏の月

長男に生れて白し夏の月

夏の空

雲みだれ山もみだれて夏の空

夏の雲

夏雲や火を噴く島の暮れんとす

夏の風

ふる郷に脚氣癒えたり夏の風

夏の雨 大原や八瀬やけぶりて夏の雨

夏の海 夕近く鳴り出だしけり夏の海

夏の水 うは言のやうに舟打つ夏の水

夏の山 北齋の首ひんまげて夏の富士

青田 嫁入の荷も吹かるゝや青田風

見渡せば青田人なし汽車の去る

清水 あみ笠をとる暇もなき清水哉

更衣 甲高く雞なきぬころもがへ



衣がへ帯に子猫のざれかゝる

早乙女 早乙女の戻れば雨のつのりけり

蚊遣火 蚊遣火や四五人去りし鬼談會

草笛 草笛や戀の二人を動かす

天瓜粉 潮風や父も手傳ふ天瓜粉

編笠 編笠をひよいとかぶせて囃しけり

祭 紫に山は晴れたり加茂祭

いさましく兒等のりこみぬ夏の宮

時鳥 駒形やふりかへりみる時鳥

時鳥寂光院と申しけり

時鳥今日から機にとりかゝる

金魚 暮れのこる軒に忙しき金魚哉

蟻 朝庭やセルに見つけし蟻一ツ

蚊 俳論の盡きず蚊蚊を叩きけり

蟬	螢	蝸	蜥
蟬鳴くや面小手捨てし芝の上	悲しさは皆仰向きし螢かな	浮びたる木の葉の上や蝸牛	紫の蜥蜴逃げたり石の堀

若葉 だしぬけに若葉屋敷の謠かな  
鋼鐵をつくる工場の若葉かな  
濡猫の軒這ふ雨後の若葉かな  
すかし見る朱廊の奥の若葉哉  
乳離れのやうく寝たり青葉宿

茂り 人形を抱く姉妹や庭茂る

桐の華 故郷や母の背中に桐のはな

軍服をぬぎて出づれば桐の華

月見草 熱海路は浪音低し月見草

秋

秋

墨汁に朱の一線や秋硯

癒えたれど歸るに惜しゝ島の秋

秋に痩せて骨痛々し文机

秋

晴

秋晴や空にとけこむ渡り鳥

秋晴や天に向ひて羽を吹く

秋晴や興じてとほる馬子二人

秋晴や柚の夫婦の上機嫌

演習のとゞろくに秋晴るゝ

朝寒 朝寒や水にうつりて日章旗

朝寒を月照る宿のうがひかな

夜寒 脛うちて痛きに叫ぶ夜寒哉

秋の朝 さらくと石まく音や朝の秋

秋の暮 狂ひ女の口ばたの血や秋の暮

初嵐 改心の息子かへりぬ初嵐

秋風 秋風や中仙道の胡麻の蠅

秋風や鐘に立寄る智恩院

秋風や争議の絶えぬ大工場

秋風や貝殻敷いた松縄手

秋陽 石門や秋の陽あふぐ運轉手

稻妻 稻妻や夢遊病者の屋根傳ひ

月 名月や鯨に似たる雲の上

秋の雲 秋雲に靜かに高し曲馬小屋

秋の雨 秋雨や拾ひ上げたる濡れ手紙

投げられし郵便濡れて秋の雨

花野 花野過ぎて千鳥の櫛を私す

秋の水 秋深く水ふうわりと澄みてけり

靈祭 毘生やす齡となりけり靈祭

鳴子 鳴子ひく役は目しひの妹かな

新藁 新藁の蔭に聲ありかくれんほ

秋の灯 春信や裾のちらつく秋ともし

雁 うつり住む崖の小家や渡る雁

蟲 錢湯のやうやく果てゝ蟲の聲

七星は地に退きて蟲の聲

鱒

鱒賣聲高々と向ふ土手

木

犀

木犀の香とわかるまでイみし

秋

草

水なきを惜しみし池や秋の草

秋草に寝犬と見しは人の子よ

朝

顔

瘦せてゆく朝顔の花撫で、けり

菊

萬國旗見下す丘や菊やかた

床の間の菊にとゞきし朝日かな

稻

刈

稻刈や辨當はこぶ女の子

柿

柿の實に宵からつゝのる嵐かな



柿の實に竿かつぎ出すせむし哉

西瓜 村芝居西瓜を喰ひて別れけり

絲瓜 下るだけ下りて絲瓜しなびけり

冬

冬の夜 冬の夜を職業婦人などの來て

那須茂竹氏が令息を先だてられしに

霜夜 宛知らで君が名を書く霜夜哉

寒さ 三疊に天下論ずる寒さかな

傾城の首かたむけし寒さかな  
内陣に行き交ふ袈裟の寒さ哉

冬 陽 冬の陽や一つ一つの小石影

冬の陽や電車の走る影黒く

時 雨 孤兒たちの唄ほそくと時雨けり

浪人となりてひもじき時雨かな

藪中は誰ぞ時雨れていそがしき

冬の雨 冬雨や鋪石にうつる高足駄

木 枯 夕近く木枯色をかへにけり

木枯や巾着落ちてある街道

木枯や酒買ひにゆく五年生

木枯や縁板しなふ御下宿

霰

前掛にうけし霰を見せにけり

霜

初霜や腰に癖ある大原女

雪

遠山の雪にとゞけと石投げつ

赤ん坊は癒えたり山は雪持ちて

冬の月

落語家の俵や木戸の冬の月

寒月

寒月や影いかめしき門構

寒月のたま〜雲にあひにけり

寒月や國寶たもつ寺の屋根

丑時詣

寒月や松をかゝへて呪ひ釘

枯田寺酒の百姓衆や枯田道

爐開 爐開きや姉からとゞく見舞狀

炭 かた炭の尼にはねたる寒夜哉

火燧 とりよせて見る新聞や置火燧

冬籠 鼠さへ來ぬ夜ありけり冬籠

襟卷 襟卷の黒きが似合ふ女かな

火事 走り出て櫓繪に見る大火かな

火事跡に雪の積みたる月夜哉

猪狩 猪狩やつはものどもの息づかひ

鴨鍋 鴨鍋やつゝましやかに隣の子

雪達磨 雪達磨なるらん兒等のかしましき

寒詣 星一つ西にすべりぬ寒詣

御取越 つれあひの今年はあらで御取越

歸り花 夕鳥や障子あくれば歸り花

枯蕨 蕨枯れて讀み得たりける碑文哉

大根 尼寺に抱きこまれし大根かな

短句

井戸掘る櫓をちこちの春

木遣甚句の調子よき春

心中の記事に氣のはづむ春

梅見にくぐる赤塗の門

絲でつけよとせがむ三郎(椿の繪に)

蝮出さうな茂りなりけり

拜殿で喰ふ雨乞の人(西瓜の繪に)

蛭におどろくお手傳ひの娘

額の汗をこする二の腕

蚊帳から抜けてほつとため息

汽車のとほりしあとを鳴く雁

襦袢の襟に蝗とびつく

木賊刈る手に戯るゝ犬

花咲翁をやとひたき冬

見たことなしに誰が年知る(龜の繪に)

赤い禪が豆腐屋をよぶ

知らねば雲もおそろしからず

狐ごつこをして遊ぶ兒等

かゝぐべきもの簾のみにて

白帆が一ツ暮れのこる海

テープのあたり口ばかりなり

口より冴えた羽織投げる手

義齒のせてある鏡臺の隅



ともし油を下戸買ひにゆく  
金策盡きて床に眼をやる  
卵の殻に親の顔かく

故人の句稿手控などから、この二百十句を抄録し、大體、時候天文地理人事動物植物の順に序列いたしました。そして、那須茂竹氏の示教によりて、次第を定め、遺ちたるを補ひ、就正の句を載せることを得ました。句に舊作あり近業あるはもとよりであります。併道に一家の見を持たれた故人として、集句上にも種々の考があつたこと、想はれます。匆忙の間とはいへ、疎漏の點多からんは、故人に對して深く謝せねばなりません。卷末の二十六短句も、故人の手録に據り、故人が時々木下奎太郎氏等の諸家と共に試みられた連句の面影を偲び、故人獨特の異彩を窺ふべきものとして附載いたしました。

昭和四年五月二十日

石田元季



